

一般的にいつて、明治文学の中心は、神、自然、人間の関係にあったといつてよからうと思う。その意味で、明治文学と基督教との関係の究明という課題は、明治文学の性格を考える上に大変重要であると思われる。しかし、笹淵友一博士の極めて精密な研究があるにはあるが、他の分野の研究に比べて、矢張り、總体的にいつて手薄であるように思われる。殊に、同志社を中心にして、同志社から巣立つた文学者の業績を、同志社の基督教との関連の上に立つて検討する仕事はほとんど手がつけられていない。さらに、明治文学を考える場合、この問題と同時に、明治以降の日本の文学は、西洋文学の影響下に発育してきたといわれるが、西洋文学を受け入れた素地の究明が必要となる。西洋文学が入って来るまでの文学は、漢文学であり、和歌を主軸とした日本文学であることはいうまでもない。この東洋文学、日本文学が、西洋文学のある部分と結合し、調和して、明治以降の新しい文学の基礎となつたわけであるから、明治以降の文学の本質を実証的に究明

しようとすれば、当然、西洋文学と結合し、調和し得たものは、東洋文学、日本文学のどのようなものであつたか、逆にいえば、西洋文学によつて斥けられたものとはどういうものであつたかの究明が必要となつてくる。その意味で、西洋文学の側からの



同志社初期の文学活動

中 略

み、光をあてて、近代日本文学の半産性のみを問題にするというやり方だけに止まるのでなく、和歌、漢文学の側から接近する必要があるので、このような面も、相対的にみて、矢張り、手薄のように思われる。その上、このような視点は、基督教受容、ま

た、基督教の明治文学への流入を考える場合にも必要であると思われる。

最近、同志社に奉職したのが直接の動機になつて、同志社初期の文学活動の研究に着手したが、その文学活動は、明治二十年から二十八年にかけて発行された「同志社文学会雑誌」でみることができる。勿論、素人の作品であるけれども、熱烈な基督教徒であり、西洋文化に接触した新しい知識人がどのように考え、どのような表現をみせたかを辿ることは、近代文学形成期における基督教と文学との交渉をその土壌に探ることにもなる。ところで、そこに表現されているものは、東洋風の古風なヒロイズムと基督教信仰との融合、自然美への陶醉と同質化され、情緒化された基督教信仰である。その意味では、神、自然、人が調和、連続の相において捉えられ、神の愛も人間的愛に包摂される。この表徴は同志社における神学の位相と無関係ではなかつたと思われるが、これとの相関の上においての微視的追究は今後の課題として残されている。

(女子大講師・國文学)